思い。それは桜の木の下で。

不知火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い。それは桜の木の下で。

【Ｎコード】
Ｎ６８１９Ｙ

【作者名】
不知火

【あらすじ】
九番隊副隊長の檜佐木修兵。
十一番隊第五席の綾瀬川弓親。
ある桜の木の下で交錯する二人の思い・・・・

檜佐木と弓親

九番隊の隊舎で書類仕事を黙々と片付ける人がいた。
九番隊副隊長の檜佐木修兵である。
前九番隊隊長である東仙要が死に、檜佐木は一人で九番隊を纏めあげていた。同じく隊長不在の三番隊と五番隊もまた、副隊長がそれぞれ自分の隊を纏めていた。
あの戦いが終わって一年半。
尸魂界は有り得ない程平和である。
流魂街に虚は出るものの、それ以外はいたって普通だった。
コンコン。
ドアをノックする音が聞こえる。九番隊にお客なんて珍しいなと思う檜佐木。
えっ？何で客なのか分かったのかって。
ヒントは二つ。一つは、自分の隊の人間なら基本ノックのあとはすぐに入ってくる。
二つ目は外にある霊圧だ。
檜佐木はこの霊圧を知っている。かつて剣を交えた、副隊長格の五席。
「入っていいぞ、綾瀬川。」
呼び掛けると、そこには、派手なエクステをつけたオカッパの青年。と、もう一人、金髪の少年がいた。身長は１６０にも満たないその少年はぺこりと頭を下げた。
「ど～も、檜佐木副隊長。」
爽やかな笑顔の下に敬意なんてものは存在しない。というよりも、十一番隊にそれを求める方が無理だ。
「珍しいな。十一番隊がうちに来るなんて。雨でも降るんじゃないのか。」
率直な疑問である。

十一番隊は基本的に他隊とつるむのを嫌う戦闘狂の集まり。個人のつきあいは、六番隊と七番隊が殆どだろう。
「ひどい言われようだね。せっかく新入隊員の紹介もかねて、うちに混ざってた九番隊の書類、持ってきてあげたのに。」
「そういうのは下にやらせればいいだろう。なんでわざわざ五席のお前が来るんだ？」
五席は上位席官の一人。
本来こういう使いぱしりは下っ端がするものである。
「うちの連中にそんなこと遣らせられないよ。ここに来る前に塵になるのがオチだよ。それに、ついでって言ったはずたけどね。」
確かに。
妙に納得できてしまうのは、やはり十一番隊だからだろう。
「まあ、とりあえずサンキューな。それで、本題はそっちの奴のことか？」
檜佐木は弓親の横にいる少年に視線を移す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6819y/

思い。それは桜の木の下で。

2011年11月20日19時15分発行